

## 『保護された生活』：

## エレン・グラスゴーの神話的世界

相 本 資 子

『保護された生活』(*The sheltered Life*, 1932) は、エレン・グラスゴー (Ellen Glasgow) が、『不毛の土地』(*Barren Ground*, 1925) に次いで書いたクィーンバロー三部作の最後を飾る作品である。グラスゴー自身、その三部作の一つである『ロマンティックな喜劇役者達』(*The Romantic Comedians*, 1926) の序文で、「三年間、私の心を悲劇的生活の中に浸してきた『不毛の土地』を仕上げたあと…喜劇的精神がその檻の横棒にぶつかってあばれ始めた。…それが求めたのはアイロニックな響きをもった微妙な笑いである」<sup>(4)</sup> と述べているように、クィーンバロー三部作は、グラスゴーの代表作と言われる『不毛の土地』とは趣を異にするが、これからとりあげる『保護された生活』は、『不毛の土地』同様、グラスゴーの作品群の中で最もすぐれた小説のうちの一冊だと言われている。

また、グラスゴー自身の分類では、リッチモンドの都市生活を扱った「都市小説」の中にはいるが、多くの批評家には「風俗喜劇」だと言われてきた。確かにこの小説では、南北戦争後のアーチボルド家とバードソング家を中心とした、南部貴族階級の風俗、習慣、道徳が描かれている。特に、元弁護士で75歳のアーチボルド将軍 (General Archbald) や典型的南部貴婦人のイーヴァ・バードソング (Eva Birdsong) は、昔から住んでいた人々のほとんどが去ってしまったワシントン・ストリートで、戦後40年も経っているにもかかわらず、戦前の南部の伝統を守り続けていた。将軍もイーヴァも、自分を犠牲に

してまで、戦前からある古い道徳にかなったこと、正しいとされていることのみを実行してきた人物であった。

それに反して、将軍の孫娘のジェニー・ブレア (Jenny Blair) は、小説の冒頭から将軍たちの生き方に反抗する人物として登場する。というのは、この小説は、ジェニーが将軍に無理やり押しつけられている本、『若草物語』を読んでいる場面で始まるのだが、ジェニーはこの本のことを「退屈で古めかしい」<sup>(6)</sup> と思い、一頁につき1ペニーの報酬がもらえることだけを楽しみに、否否ながら読んでいるのだ。将軍にとっては幸せに思えるマーチ家の生活も、ジェニーにとっては退屈だけで、自分には違った生き方があると信じている。そして、ジェニーは常に「私を出して！私を出して！」(p. 126) と叫んでいるように見え、クィーンバローの社会や仮装舞踏会、慣習などから脱け出し、将来はニューヨークかパリへ行って、「何かちがうもの」(p. 127) になりたいと考えているのである。

以上のように、ジェニーは、戦前の南部の生き方を続けている古い世代に対して、ニュー・サウスを代表する新しい世代の一人として描かれている。ここに、古い世代対新しい世代、オールド・サウス対ニュー・サウスという新旧両世代の異った考え方、風俗の対立葛藤が見られる。M・ティエボーは将軍とイーヴァを「古い道徳に従い犠牲となった理想主義者」と呼び、「新しい体制での破壊的力をもつ幸福追求者」としてのジェニーと対比させている<sup>(6)</sup>。

ところが、この小説においては、リチャード・チェイスによる風俗小説の定義にもかかわらず、「個人の行動のずれや歪み」が「常識という名の社会的に共有された知恵」というある一定の価値判断の基準によって是正されるか、あるいは、その個人は社会から追放される<sup>(6)</sup> といったことは起こらない。そのせいか、チェイスは『保護された生活』を風俗小説の例としてあげてはいるが、その著書の中で論じていない。また、高橋正雄氏も、この小説について、新旧両世代の対立の捉え方が思いつきので、深くつきつめようとしていないと批判している<sup>(6)</sup>。さらに、アレン・テイトはグラスゴーに送った手紙の中で、「あ

あなたはあなたの主題を風俗小説の分野を越えて悲劇的ヴィジョンにもっていった」と述べている<sup>6)</sup>。どうやら、この小説を「風俗小説」としてのみ考えようとするとところに問題があるように思われる。では、アレン・テイトの言う風俗小説の分野を越えた「悲劇的ヴィジョン」とはどういうことなのだろうか。

ブレア・ラウズは『保護された生活』は「時間の侵食」に深く関わっていると述べているし、「破壊する時間」や「時間による摩滅」がこの小説に描かれている、という批評家もいる<sup>7)</sup>。それでは、具体的には「時間」がこの小説においてどのような役割を果たしているのか、グラスゴウ自身が『保護された生活』の主人公であると断言している人物、将軍を中心に、この問題を考えてみたい。

将軍は、古い南部の貴族社会に生きてきた人物であり、今もなおその社会を理想として守り続けている。彼はその理想を守るために、自分自身を犠牲にしてまで、したくないことをしてきた。将軍は小さい頃は「いくじなし」(p. 102)と呼ばれ、かわいそうなものや哀れなものに心ひかれる優しい少年で、詩人になりたいと思っていた。当時男らしいスポーツとされていた狩りをするのも嫌いで、動物を銃で撃つこともできず、一度は撃たれたシカの血を見て気分を悪くしたほどであった。その彼が、敵と戦い殺すことが職業の軍人になったのだ。また同じく、幼少の頃、将軍は哀れな逃亡奴隷を助けたこともあった。これは明らかに法律違反であったが、その彼が後に、法律と密接に関わりのある弁護士になるとは何たる皮肉だろうか。将軍は、良い市民、あるべき市民になるため、彼の本質である詩人としての気持ちや哀れみを感じることでできる心を抑えてしまったのだ。

同じことが将軍の結婚についても言える。将軍には好きな女性がいたが、彼女は人妻であった。二人は駆け落ちをしようとするが、駆け落ち実行のその晩、彼女の子供が発病し、それぎり将軍は彼女のことをあきらめる。それに反し、将軍の結婚生活は彼の意図したものとまったく違っていた。たまたま吹雪の夜、彼と、後に彼の妻になる女性は、一晩中二人だけでそりに取り残され

るという事故にあう。次の日、将軍は、体裁をとりつくろうために、愛してもいない彼女と結婚することにする。以来30年間、妻が亡くなるまで、将軍はその結婚生活を続けるのだ。妻の死後、再婚してもいいと思う女性もいたのだが、それも娘たちのことを考えてあきらめてしまう。

このように、将軍の人生は、すべて彼の意志や気持ちとは逆の方向に向かって進んできた。彼は、自己を犠牲にしてまで、優秀な弁護士、誠実な夫や父のふりをしてきたのである。それというのも、古い南部の貴族社会における規律や道徳を守るためであった。「30年間、彼は、彼の青春、中年、夢、想像力、人間に不可欠なすべての本能を、伝統のもつ道徳的まじめさのためになげうってきた」(pp. 25-6)。彼の理想である古い南部の伝統に基いた貴族生活を変化させることなくいつまでも保とうとする将軍のこの態度は、時間の流れを否定した、時代錯誤的なものと言えるだろう。

将軍の時間や変化の否定は、他の点からも明らかである。将軍にとって現在の世の中は「荒涼とした、無色の風景」(p. 107)に思え、現在は過去より良くなっているとは考えられない。女性が現代的な帽子とコートを身につけて、さっそうと自動車に乗って出かけていくのを見た将軍は、「1890年代の美女たちが、優雅なほろ馬車に乗って慎え目に魅力を見せびらかしたのに比べて、ずいぶん見劣りがする」(p. 132)と思うし、現在のさまざまの音や臭いまでも、以前よりロマンチックでなくなったと嘆く。ひたすら昔の古い南部をなつかしむ将軍であるが、実際には刻々と世の中は変化している。そこで将軍は、彼の「理想主義」が「不快なものを追い払うふりができることを望んで、」(p. 236)変化した現在が見えないふりをする。その結果、将軍はしばしば白昼夢を見るようになる。その様子は第二部の「遠い過去」にくわしく書かれているが、変化のうず巻く現在から目をそむけ、白昼夢を見ているときだけが将軍にとっては幸せなときなのだ。なぜなら、白昼夢を見ているときには、時間や変化を排除し、彼の理想である過去に戻ることができるからである。「夢以外では、過去は常に彼から逃れてしまうのだった」(p. 116)とグラスゴーは書いてい

る。また、作者は、將軍の肉体的に老いた姿を描写しているが、白昼夢を見ているときだけは、將軍は若返った気になれる。「私はひどく年老いている。しかし一時間前には緑色のベンチの上で若返っていた。私は時間を超越し、若かったのだ」(p. 126)。これは將軍が、時間を否定し、若かりし頃の幸せだった古い南部へ戻ろうとしていることを示していると思われる。また、「將軍の目はいまだに、もっとロマンチックであった時代のにじ色のフィルムを通して人生を見ていた」(p. 137)という表現は、彼が古い南部の価値観で人生をながめていることを暗示しているだろう。

將軍には、「彼女に何か起こるなら、右手を失った方がました」(p. 99)と宣言するくらい、理想として崇めている女性がいる。近所に住む南部貴婦人イーヴァである。イーヴァはクィーンバロー随一の美女で、「バラと百合の花のよう」(p. 52)であり、「木の葉が舞うような」(p. 54)美しい声の持ち主であった。その美貌ゆえに町中の人々の理想となり、美しい彼女を見たい人々が殺到するために、結婚式の行列ばかりでなく葬式の行列までも遅らせたことがあった(p. 6)。ジョージ(George)と結婚した後は、貞節な妻として夫に仕え、ジョージ以外の男性とはダンスも踊らないほどであった。召使いのように一生懸命家事をする、完璧な妻であるイーヴァは、南部貴婦人の典型と言える。南部貴婦人という概念は、南北戦争後、古い南部へ戻ることを主張する人々が好んで使ったことからわかるように<sup>6)</sup>、南部貴婦人として描かれているイーヴァは、將軍が理想とする古い南部の貴族社会の象徴と断言できる。したがって、將軍にとってイーヴァは「彼の最後の幻想」(p. 279)であり、イーヴァのことを夢想していると心が満たされるのだ。

ところが、イーヴァはそれだけにとどまらず、彼女自身、古い南部の象徴である自分自身が変化することを拒み、あくまでも理想化された自分を保とうとする。イーヴァは、どんなに庭が荒れていても、自分で土を掘り返したりしない。なぜなら、せっかくの彼女の美しい手を汚してしまうからだ。また、「私は美貌を失っていないということを見たい」とイーヴァは言い、

「以前と変わらぬ美しさだ」(p. 56) と人から賞賛されることを喜ぶ。誰からも見られていないと思われるときには、イーヴァは疲れた表情を見せるのだが、ひとたび誰かが自分を見ていることがわかると、急にこやかに微笑む。イーヴァは、あくまでも自分の美しさが変わらないことを望み、そのようなふりをする。また、彼女は子供を欲しがらず、温室で育った花だけを好む。子供が嫌いなのは、出産という生物学的なサイクルとしての時間に関わっているからだろうし、温室で育った花が好きなのは、季節という変化に関係のない花だからだと考えられる。これらのことは、時間や変化を嫌うイーヴァの姿をよく表わしていると言えるだろう。

イーヴァは理想化された自分を崩そうとしないが、特にそれは夫ジョージのためであった。「ジョージはイーヴァと恋に落ちた。なぜなら彼女は理想であったから。彼女は最後まで彼の理想でいることに決めたのだ」(p. 200) と説明される。イーヴァはもともと歌手になりたかったのだが、ジョージに出会った後は、理想的な妻になるために歌手はあきらめ、本当の自分自身ではなく、理想化された自分の姿を追いつけてきたのだ。イーヴァにとってジョージとの愛はすべてであり、何ものも二人の間にはいることを許さなかった。そのため、ジョージが他の女性を見るだけでも嫉妬するくらいであった。ところが一方、ジョージはイーヴァと違って、度々浮気をする不誠実で弱い男であり、イーヴァに最もふさわしくない男と言われている。イーヴァはジョージに完璧な夫であることを望むが、その期待感に耐えきれなくなったジョージは、「彼女は私に期待しすぎた」(p. 185) と嘆くこともしばしばであった。もちろん、イーヴァはジョージが彼女の自己犠牲に値しない男性であることは知っていたが、彼を信じているふりをやめることはできなかったのだ。なぜならイーヴァには、「ありのままのことは耐えられなかった」(p. 60) からである。

赤裸々な現実の姿にではなく、理想化された世界を、ふりをしてまで保とうとするイーヴァの姿勢は、ペイトン夫人 (Mrs. Peyton) のパーティーでの出来事によく表わされている。ジョージがデリア (Delia Barron) と腕を組んで

出て行く姿を見たイーヴァは、異常に取り乱す。しかし、ペイトン夫人に「お黙りなさい、イーヴァ。見なかったふりをするのがずっと賢いやり方なのよ。たとえ知っているとしても、何も疑わない方が安全なのよ」(p. 87)と言われ、落ち着きを取り戻したイーヴァは、また、本当の自分自身も現実の夫も見えないふりを続ける。「体裁をつくろうことはイーヴァにとって習慣以上のものである。それは第二の天性だ」(p. 19)とグラスゴーは説明する。このように、「秩序」や「美」や「完全さ」や「理想」を表わすイーヴァは、理想化されたあるべき女性、あるべき妻、あるべき夫との愛を変化させることなく保とうとしてきた。南部貴婦人をその象徴とする古い南部の価値や理想を今だに守ろうとするこのイーヴァの態度は、将軍同様、時間や変化を否定するものと言える。ふりをすることは、そのための最大の武器なのだ。

将軍は一家の主人として家族の女性たちを保護してきた。そのうちの一人が、すでにふれたように、ニュー・サウスの代表とされる孫娘のジェニーである。将軍はジェニーを「悪」「醜さ」「不快」といったものから保護してきた。おばのエッタ (Etta) は、誰からも愛されないと思いこんでいるオールドミス of 女性で、ときどきノイローゼ気味になる彼女は、夜中に起き出して、アーチボルド夫人 (Mrs. Archbald) に苦痛を訴えに来る。そんなエッタについては、単に悪い夢を見ただけだから、とジェニーは言い聞かせられる。また、もう一人のおばのイザベラ (Isabella) がトマス (Thomas Lunsford) と婚約解消をした真実の理由は、婚約中に別の男と馬車に乗って出かけたまま、翌日の朝まで帰らなかったからなのだが、ジェニーは、イザベラの気持ちがあはつきりしなかったからだと聞かされる。このようにして、醜い現実からは保護され、楽しい世界だけを見て育ったジェニーは、悪というものをまったく知らない無垢な少女で、苦しみ、悩み、悲しみといったもののない幸せな生活だけを望むようになる。「彼女の望みは、誰も傷つけることなく、少しも厄介を起こすことなく、彼女自身の人生を楽しく生きることであった」(p. 226)とグラスゴーは書いている。

苦しみや悲しみの代わりに、ジェニーの保護された世界には空想や幻想が一杯である。鏡を見ていると、自分が不思議の国のアリスになったような気がしたり、自分は森の妖精の目と髪を持っていると思いきなりする。ジェニーにかかると、工場の薬品の臭いまで「おもしろい臭い」となってしまう。現実には「飽き飽きする」だけで、空想の世界こそ「胸がどきどきするような喜び」（p. 264）なのだ。若い医師のジョン（John Welch）は、ジェニーに貧しい人々の話をするが、そんな話はジェニーの最も嫌いなもので、彼女を憂うつにってしまう。現実と直面することなく、見たくないものは存在しないふりをするジェニーの態度について、ジョンは「すずめのヴィジョン」（p. 220）であるとか、「誤った態度」（p. 273）であると非難するが、そんなジョンに対しては、ジェニーは嫌悪を感じるだけであった。ジェニーを「みせかけ」の世界に住む、いつまでも大人になることのない、無垢な子供でいられるように育てた將軍の教育方針は、時間や変化を阻止しようとするものと考えられる。

J・R・レイパーが、「イーヴァやジェニーやその他の家族の女性たちは、將軍の創造物である」<sup>94</sup>と述べているように、イーヴァは將軍の理想である古い南部の象徴であるし、ジェニーは、古い南部をひたすら夢みる將軍が育てあげ、庇護している少女である。その意味では、イーヴァも、一見新しい世代の代表と思えるジェニーも、時間を否定してオールド・サウスの貴族社会を変化しないように保とうとしている、ノスタルジックな將軍の産物と言えるだろう。將軍には、現実にある、時間や変化のもたらす苦しみや悲しみには耐えられず、彼の時間は戦前の南部の時点で止まっており、彼の理想は、あくまで時間や変化のない、楽しく幸せな古い南部の神話的世界なのだ。L・H・マッキーサンは、アメリカの南部人は、古い南部を「アルカディアの夢」とみなし、神話的なエデンの世界と同一視している、と述べ、現実の工業化された南部から逃げるために過去への郷愁を強め、それが小説の中においては、子供時代と結びついた昔を理想化し、それとの比較において、現在の社会を批判するといった牧歌的モチーフとなって現われる<sup>95</sup>、と主張していたことを付け加えてお



く。

ところが、いくら将軍たちが、時間や変化のない神話的な世界を保ち続けようとしても、しょせん彼らの世界は「みせかけ」の世界なので、長続きはしない。ではいったいどのような形で将軍たちは「時間の侵食」を受けるのだろうか。まず、イーヴァは病気という変化に襲われる。ジョンは、「イーヴァのこれまでの生き方は不自然だ。彼女は結婚して以来、自然に息をしたことがなかった、と正直なところ思うね。もし彼女が死ぬようなことがあれば、彼女を殺したのは長いみせかけの人生だよ」(p. 153)と説明する。イーヴァは、理想の女性というイメージを保つのに疲れてしまったのである。病気になったイーヴァは、彼女が最も時間や変化から大切に守ってきた若かりし頃の美貌を失ってしまう。「悲しみ」と「苦しみ」によってすっかり変わりかけた彼女の姿が描写され、顔にはしわがででき、「青白く、疲れて、年老いてみえた」(p. 150)と表現されている。これは、時間や変化のうず巻く現実が見えないふりをしてきたイーヴァに、明らかに時間が侵食してきたことを示す。グラスゴーは、「イーヴァは時間のゆっくりした沈殿物に屈した」(p. 138)と書いている。すべてのものを犠牲にして守ってきた美貌を失ってしまったイーヴァは、「完全なる崩壊」(p. 213)や「敗北の表情」(p. 222)と言われ、彼女自身、「すべてを失ってしまったようだ」(p. 269)と嘆くほど「裸のまま」(p. 181)の状態になってしまう。理想という自分のイメージをあまりに追い求めすぎ、本当の自分を失っていたイーヴァは、病気という変化によってイメージの自分をも失った今、自分には何も残されていないことに気づくのだ。あげくの果てに、彼女は度々、夢遊病の状態で家をとび出すようになる。イメージの自分が作りあげたイメージの家の中にいるのがいたたまれなくなるのだ。時間と変化を否定し続けてきた彼女は、結局は幻想を追い求めていたにすぎなかったのである。以前には、庭の中の「輝きと喜びに満ちたもの」(p. 57)と言われていたイーヴァが、病気をしてすべてを失った後には、雑草が生え放題の荒れ果てた庭園にたとえられている(p. 258)。ここで、イーヴァの名前の象徴性から、彼女は

エデンの園のイヴを思い起こさせる女性であったことが思い出されるが、時間がけっしてはいりこんでくるはずのなかった神話的なエデンの世界も、ここでは時間の侵食から逃れられなかったことを意味する。ブレア・ラウズが「イーヴァは神話とその犠牲者を表わしている。彼女は南部の美の化身であり、その神話の要求によって押しつぶされる」<sup>99</sup>と書いているように、イーヴァは南部神話の象徴であり、その神話を維持しようとしたために自滅してしまったのである。

そして、ついにイーヴァの神話的な世界が完全に崩壊するときがくる。皮肉なことに、その原因となったのは、イーヴァと同様に時間と変化のない世界で保護されていたジェニーであった。実は、ジェニーは九歳の頃からジョージに恋心を抱いていた。といっても、「みせかけ」の世界に生きるジェニーのことなので、ジョージのシャツやパジャマが物干しに掛かっているのを見て一瞬熱がさめる場面にも表われているように、現実のジョージを愛しているのではなく、恋に恋しているだけであった。ところが同時に、ジェニーはイーヴァのことも敬愛していた。ジェニーが好きなイーヴァは、やはり理想化された「みせかけ」の世界の中のイーヴァである。それゆえ、イーヴァが病気になったときにも、病気や死と無縁に育ったジェニーには、それらがイーヴァに近づくなどとても信じられない。ジェニーは病気に苦しむイーヴァに深い同情を感じ、イーヴァのためなら何でもするわ、と言って看病に通うが、ジェニーにできることは、「苦しみを理解することなしに苦しみを分かち合う」(p. 271) ことだけであった。ファンタジーの世界に生きるこのようなジェニーには、自分がジョージを恋することが、どんなにイーヴァを傷つけることになるか、など想像もつかないことであった。悪や苦しみのない世界で育てられたジェニーには、ジョージとの恋が悪いことなどと考えつきもせず、イーヴァに対する罪の意識はまったくなかったのである。「君は火のついた導火線のように危険だ。君が知っていようがいまいが、18歳にまでなる無垢は悪だ」(p. 262) というジョージがジェニーに言った言葉は、ジェニーの残酷な無垢をよく示している。そし

て、ジェニーがジョージと抱き合っている場面を目撃したイーヴァは、猟銃でジョージを殺害する。このジョージを殺害するという行為は、イーヴァが信じているふりをしてきた「みせかけ」の世界を守ろうとする最後の手段だったのかもしれない。しかし皮肉なことに、ジョージの死という変化がはいりこむことによって、時間や変化のないイーヴァの神話的世界に終止符がうたれるという結果になるのだ。

同時に、この惨事の原因となったジェニーの「保護された生活」も崩壊したことになる。時間や変化を否定する将軍によって悪から保護されて育ったジェニーは、無垢ゆえに悪を知らず、このような悲劇をひき起こしてしまった。もともとジェニーは、将軍やイーヴァのような古い世代の人々とは違った生き方をしたいと思っていた。ところが、イーヴァのような女性になりたいと思った瞬間から、ジェニーはイーヴァのあとを追い出したのだ。ジョージとの一途な恋も、「何をするにしても、あなたの幸せをたった一度のチャンスに賭けてはだめよ」(p. 271) というイーヴァの忠告にもかかわらず、ジェニーがイーヴァの二の舞を演じていたことを示している。この意味では、ジェニーは、新しい世代を代表する人物というよりは、むしろイーヴァと同じように、時間や変化を否定する南部神話の犠牲者として描かれているようだ。

イーヴァとジェニーという二人の犠牲者を出したことは、同時に、イーヴァを理想の女性と崇め、ジェニーを悪から庇護してきた将軍自身の理想や夢が崩壊したことを意味する。「時間の侵食」を阻止し、エデン的世界である古い南部へ帰るといふ、将軍の「南部の夢」は、もはや実現不可能なのである。将軍の歩んできた人生は、すべてが思っていた方向と逆に進むという皮肉なものであったが、今回の事件も実にアイロニカルである。なぜなら、将軍が理想の女性に仕立て上げたイーヴァと、幸せになるようにと保護してきたジェニーの二人に、このような悲劇がひき起こされたのだから。さらに、小説の最後の場面にもアイロニーが感じられる。ジョージの死を目の前にした将軍は、これは「事故」だと主張し、「彼女はどんなに若く無垢なのかを思い出せ」(p. 291)

と言ってジェニーをかばい続け、他方、ジェニーはあいかわらず「何もするつもりはなかったの」(p. 292)と叫んでいる。殺人を犯したイーヴァは、「体を垂直にして静止した微笑を浮かべて坐っていた」(p. 290)と描写され、理想の女性であり続けようとしていたときに彼女の習慣となっていた微笑みと同じ微笑みを浮かべていた。彼の理想とする世界の崩壊を目の前に見ながらも、まだ將軍はジェニーとイーヴァをかばい、ジェニーは無罪を訴え、イーヴァはあたかもふりを続けるように微笑みを浮かべるとは、なんとアイロニカルなことだろうか。M・ティエボーは「結末のアイロニーは、事件の重要性を誰も評価することを許されていないことだ」<sup>99</sup>と述べている。これらのアイロニーがあるゆえに、將軍のセンチメンタルな時代錯誤的態度の愚かさは、ますます強調されることになるのである。

ここで見落としてならないのは、將軍の「みせかけ」の世界が崩壊する一方で、クィーンパローの町も変化という「時間の侵食」に脅かされていたという事実である。「血縁関係と伝統のきずなによって結びつけられ、」(p. 5) 平和に暮らしていたクィーンパローの町の人々も、今では工業の発達に伴う、工場のいやな臭いによって悩まされていた。美しかったクィーンパローの町並もしだいに消え、汚なさが目だつようになった。「優雅さがかつては栄えていた」(p. 236) ワシントン・ストリートも木立は切り倒され、ビルや商店やガレージに変わり、「下宿屋や店屋の階級」(p. 132)に落ちぶれていた。グラスゴウは、崩壊しかけている町の様子を、工場の臭いの漂う庭園のイメージで描写している。

In the garden, which was reached by stone steps from the back porch, splendour flickered over the tall purple iris that fringed the bird-bath and rippled like a bright veil over the grass walks and flower-beds. A small place, but it held beauty. Beauty, and that deep stillness through which time seems to flow with a perpetual rhythm and pause. On the edge of the bird-bath a robin stood drinking. Farther away, two black and yellow butterflies spun round and round, without flight, as if they were attached to invisible threads. Only at

long intervals, when the breeze died down and sprang up again, was the tranquil air brushed by a roving taint, a breath of decay, from the new chemical factory near the river. Now rising, now falling, the smell was scarcely more than a whiff that came and went on the wind. Scarcely more than a whiff, yet strong enough, when the houses were open, to spoil the delicate flavour of living (pp. 4-5).

かつて美しい楽園であったクィーンバローの町も「時間の侵食」を免れることはできず、町の人々の「変化、不幸、進歩」に対する「抵抗」(p. 5)もむなしなものとなってしまったのだ。さらに、イーヴァがジョージを殺害する事件が起こったちょうどその年、ヨーロッパでは第一次世界大戦が始まった。戦争も、死や破壊という変化に密接に結びついたもので、世界を崩壊と混乱におとしいれると考えられる。M・ティエボーが「グラスゴーは、道徳の衰退、町や領域の悪化、切迫した世界的戦争などすべてを一つの下降する動きの諸相として見ている」<sup>64</sup>と書いていたように、將軍の理想としたエデン的な神話の世界の崩壊、クィーンバローの町の変化、戦争の勃発——これらはすべてひとつにつながらる。そして、小説の最後でイーヴァがジョージを撃ち殺した瞬間、「通りからの突然の騒音」や「内と外とでガラガラとものが崩れる長い反響音」が聞こえ、「不快な臭い」(p. 289)が漂い、時間のはいってこないはずであった神話的な楽園の世界が完全に崩壊されたことを暗示する。

ところが、この「時間の侵食」による崩壊は、クィーンバローという都市だけに起こったことではない。すでに指摘したように、これは、時間を止めて、いつまでも美しい南部貴婦人でいようとしたイーヴァ、いつまでも無垢な子供でいようとしたジェニー、そしてこの二人の女性を創造することによって、古い南部を変化させることなく保ちたいという南部人將軍の持っていた南部の神話が崩壊したことをも意味する。

さらに、ここで、時間や変化のない幸せな世界を追い求めるのは、古い南部へのノスタルジアを持ち続ける南部人だけではないことに気づく。D・W・ノーブルは、アメリカの中心的神話を「時間の超越」と規定して、「アメリカは

ヨーロッパの国々とちがって、自然との時間のない調和を保ってくらすために、アメリカ人を歴史的变化という恐怖から逃れてきた選民とする、という契約をもっている」<sup>(1)</sup>と書いていた。どうやら、将軍と彼の創造した女性たちは、時間やそれのもたらす変化を否定するというきわめてアメリカ的衝動を持つ人物であると言えるようだ。古い南部へ戻ることを願うアメリカの南部人の持つ南部神話は、アメリカを楽園とみなすアメリカ人の持つアメリカ神話と密接に関わっていると言い切ってよいだろう。したがって、この小説の結末は、時間や変化を否定し、完全なエデン的世界に幸せにくらせるというロマンチックなアメリカ人たちが持っている「アメリカの夢」の崩壊をも暗示することになる。「すべての場所で、人々は無益にも人生を本当ではないものにしようとしている。不可能な幸福を得ようと奮闘しているのだ」(p. 144)という言葉や「大きな意味では、同じような悲劇は、クィーンバローよりももっと広い領域でくり返されていた。世界大戦は始まり、可能な限り高い理想のために人々はお互いに殺し合っていた。これがこの小説のテーマの最終目的である。特に南部だけでなく、世界中で思想や形式は変化し、よく知られている秩序や信念、確実性はなくなりつつあった」(p. xviii)というグラスゴウ自身の説明は、南部人の憧れる神話的世界の崩壊だけではなく、新世界を地上の楽園とみなそうとするアメリカ神話の悲劇的結末をも示していると言えるだろう。『保護された生活』という小説は、風俗小説のせまい枠組の中で、南部という限られた地域を扱いながら、実は「時間の超越」というアメリカの中心的神話と深くかかわった、きわめてアメリカ的な小説であると結論できる。

註(1) Ellen Glasgow, *The Romantic Comedians* (1926; rpt. Kyoto: Rinsen Book Company, 1974), pp. viii-ix.

(2) Glasgow, *The Sheltered Life* (1932; rpt. Kyoto: Rinsen Book Company, 1974), p. 3. 以下『保護された生活』からの引用頁数は( )内の数字で示す。

(3) Marcelle Thiébaux, *Ellen Glasgow* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1982), p. 151.

(4) Richard Chase, *The American Novel and its Tradition* (Baltimore: The

- Johns Hopkins University Press, 1957), p. 158.
- (5) 高橋正雄『アメリカ自然主義の形成』（富山房, 1973年）197頁。
- (6) Allen Tate as quoted in Linda W. Wagner, *Ellen Glasgow: Beyond Convention* (Austin: University of Texas Press, 1982), p.92.
- (7) Blair Rouse, "Ellen Glasgow," *Southern Renaissance: The Literature of the Modern South*, ed. Louis D. Rubin Jr. and Robert D. Jacobs (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1966), p. 131; Thiébaux, *op. cit.*, p. 145; C. H. Holman, "The Comedies of Manners," in *Ellen Glasgow: Centennial Essays*, ed. M. Thomas Inge (Charlottesville: University Press of Virginia, 1976), p. 115; Rouse, *Ellen Glasgow* (New York: Twayne Publishers Inc., 1962), p. 113 などを参照。
- (8) Anne Goodwyn Jones, *Tomorrow Is Another Day: The Woman Writer in the South, 1859-1936* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981); 井出義光「南北戦争の意味したもの」『多様の中の統一』講座アメリカの文化 4 (南雲堂, 1969年) を参照。
- (9) Julius Rowan Raper, *From the Sunken Garden: The Fiction of Ellen Glasgow, 1916-1945* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1980), p. 147.
- (10) Lucinda Hardwick MacKethan, *The Dream of Arcady: Place and Time in Southern Literature* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1980), pp. 3-13.
- (11) Rouse, *Ellen Glasgow*, p. 110.
- (12) Thiébaux, *op. cit.*, p. 149.
- (13) *Ibid.*, p. 144.
- (14) David W. Noble, *The Eternal Adam and the New World Garden: The Central Myth in the American Novel Since 1830* (New York: George Braziller, Inc., 1968), p. ix.